

氏名	大林純子
学位の専攻分野の名称	博士（総合政策）
学位記番号	甲総第17号（文部科学省への報告番号甲第529号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2014年3月14日
学位論文題目	ビショップ博物館におけるハワイ先住民の表象とその変容： 博物館の展示にみるコロニアリズムから ポストコロニアリズムへの転換
論文審査委員	（主査）教授 山中速人 （副査）教授 加藤晃規 大森康宏（立命館大学大学院映像研究科教授）

論文内容の要旨

大林純子氏の論文は、プリンセス・バニース・パウアヒ・ビショップ・ミュージアム（Princess Bernice Pauahi Bishop Museum：以下、ビショップ博物館）を対象にえらび、その展示をとおして展開された先住ハワイ人にかかる表象とその変容の分析をとおして、太平洋の一諸島ハワイにおける文化的コロニアリズムの変遷と脱コロニアリズムへの試みについて考察したものである。

ビショップ博物館は、19世紀末のハワイにおいて、太平洋諸島を席卷した植民地化の拡大を背景に、ハワイ王族の文化遺産をハワイアンのために遺すことを名目に、植民地現地において誕生した、現存するハワイ最大規模の博物館である。

19世紀末、ハワイ王国終焉の間際に誕生したビショップ博物館は、カメハメハ王族の遺産収蔵庫として、アメリカの辺境、ハワイにあって、ハワイ王族の名を冠したままコロニアリズムの遺産を引き摺ってきたといえる。そして、この博物館が提示してきたハワイ像は、ハワイ社会のエスニック・ポリティクスを支配するイデオロギーの投影でもあった。本論文では、まずこの博物館の開設に至る歴史的経緯に着目し、以来、20世紀における博物館展示における表象の分析をとおして、その背後にイデオロギーとしてのコロニアリズムの存在を指摘するものである。

しかし、この「他者」としてのハワイ（人）像を創り続けてきたオリエンタリズムのまなざしは、ハワイ先住民の社会運動に代表されるような「対抗する声」によって解体され、大きな変容を迫られるものとなった。ビショップ博物館では、2009年、先住ハワイ人の文化の展示を専らおこなうハワイアン・ホールにおいて、ハワイ文化にかかる展示表象に大きな変化が施された。このハワイアン・ホールにおける新しいハワイ表象への改変を転回点として、先住民と博物館の関係、博物館のアイデンティティの変化が明確に観察されるものとなった。

本論文は、この改変を回転軸として、展示において出現した先住ハワイ人をめぐる新たな文化表象が、先住ハワイ人とハワイ全体社会との関係におけるポストコロニアルな状況の下で、どのような文化政治（カルチュラル・ポリティクス）の位相を展開しているのか、また、しようとするのかについて考察するものである。

論文の構成

本論文は、2部構成の形式をとっている。

第I部（第1章～第4章）では、ビショップ博物館における20世紀の表象のコロニアリズムが読み解かれ、第II部（第5章、第6章）では、2006年から2009年までの約3年を要して行われたハワイアン・ホールの改修＝復元による新しいハワイ表象を詳細に観察し、ポストコロニアルのハワイ先住民の文化政治の位相が考察されている。そして、終章として、全体が総括されたのち、結論が導かれている。以下、論文の構成を概観する。

第I部 表象のコロニアリズム：20世紀のハワイ、ビショップ博物館にみるコロニアリズム展開の様相

- 第1章 幻想のハワイとオセアニア・オリエンタリズム
- 第2章 植民地化とハワイの博物館における文化表象
- 第3章 20世紀後半の博物館：大衆化と新たなコロニアリズム
- 第4章 ビショップ博物館のハワイ先住民文化表象

第II部 表象の脱コロニアリズム：ポストモダンのハワイ表象の詩学

- 第5章 21世紀ポストモダンのハワイ先住民表象：復元と再構築
- 第6章 先住民の文化政治とコロニアリズムの表象
- 終章 過去から未来へのハワイ表象

つぎに、個々の章で展開される内容を要約する。

第I部

第1章

第1章では、本論文の理論的下地となる、20世紀後半フーコーやサイドを筆頭に今日まで展開されてきた「他者」表象に対するオリエンタリズムからポストモダニズムの表象批判まで、オセアニア・ハワイ像の特徴を含めて概観している。そして、それら文化表象の政治性が、博物館という舞台をとおして、植民地の文化支配に欠かせない役割を果たしてきたことを解き明かしている。

その際、「国家発動の博物館の脱中心化」から「先住民のコミュニティ・ミュージアム」に至るまで多様な規模と形態が認められる北米の博物館のアメリカ先住民（ネイティブ・アメリカン）文化展示を先行事例として参照しながら、同時に、「表象のコロニアリズム」から脱する「ポストモダンの表象」に関わる議論として、文化の流動性を念頭にした「接触領域」としての博物館の在り方にも言及しつつ、クリフォードらによって提起された先住民文化の表象とポストコロニアリズムの関係¹についても、考察を展開している。

第2章

第2章では、ビショップ博物館の設立から20世紀前半において、ハワイ文化の表象は、ハワイが主権を失い米国統治領として植民地支配を受ける政治的背景を投影していたことを明らかにしている。19世紀末先住ハワイ人の人口減少による民族存亡の危機感や白人台頭によるハワイの主権国家体制の脆弱化、西洋文化の流入による社会文化環境の変化など、ビショップ博物館が設立されるに至る社会文化史的背景を再検証するとともに、博物館の創設期の表象や言説を記述的に分析している。

第3章

第3章では、20世紀後半に入り、米国の一州となったハワイにおける新たな社会的・文化的・経済的コロニアリズムのイデオロギーが博物館表象に反映される様子を観察している。

まず、第2次世界後、1959年のハワイ立州化の時期には、多種の移民集団の定着化と相まってハワイを理想的な「多文化共生社会」として表象する一方、先住ハワイ人の文化については、過去の文化としての表象を再生産した。

つぎに、戦後の観光産業の拡大に伴って、「楽園」のイメージが博物館においても強調された。先住ハワイ人の文化は、未開の生活を営むエキゾチックな他者として、あるいは失われた過去の遺物として陳列されたのである。

第4章

第4章では、こうして20世紀終盤まで表象のコロニアリズムを踏襲してきた旧ハワイアン・ホールの展示表象を、2000年当時の館内解説の言説を再現する形で記述している。その記述をとおして、コロニアリズムの機能主義的な展示の隙間を個々の語り手がそれぞれの言説で埋めるという形で、ハワイアンのストーリーが非ハワイ人によって構築される様子が確認されている。

第Ⅱ部

第5章

第5章では、ポストコロニアルの批判的文化表象論や先住民表象が提示する新しい「接触領域」としての博物館の役割が概観され、これを踏まえて、新ハワイアン・ホールの新しい表象の転換が記述されている。

まず、ピシヨップ博物館自身が発行した改変の概念説明から、博物館の意図する表象改変のテーマ、特に語りの主体を先住ハワイ人に変換したことが強調されている点について観察し、次に、具体的に展示の言説、言語、展示テーマの抽出、表象（ディスプレイ）方法を通して「自己」と「他者」の転換、先住ハワイ人の視点（価値観）の導入が行われる様子を実証的に記述している。

ここで最も重要であるのは、新しい展示が先住ハワイ人自身によって語られる表象として生まれ変わったことを博物館自身が表明していることである。本論文は、この変化の中に、新しい先住ハワイ人のアイデンティティの構築、ならびに、先住ハワイ人としての文化的主体の回復を見出すと同時に、博物館と先住ハワイ人の政治的取引の痕跡を読み取っている。

第6章

第6章では、先住民と博物館の間において生じた政治的紛争²が、新しい展示表象に投影されていることを、先住民運動³と博物館とのネゴシエーションの過程を詳細に追うことによって具体的に確認している。

先住民とのネゴシエーションを経て生まれた新しいハワイアン・ホールの展示では、植民地支配という歴史的事実、これまで展示の中で触れられなかった「持ち込まれた伝染病による先住ハワイ人の人口減少」、「不正義としてのハワイ王朝転覆」、「抑圧的な文化変容」について先住民自身の言説が提示されるというポストコロニアルな表象空間が現出されたのである。

終章

そして、終章において、本論文は、以上2部にわたって展開された議論を踏まえて、博物館が、歴史や文化を表象することの宿命的政治性ゆえに、従来、植民地の支配構造を支える装置としての性格を保持してきたと同時に、他方、今日のポストコロニアリズムが台頭をみる状況下にあっては、コロニアリズムの解体を象徴する先住民の文化政治の舞台にもなり得るという、博物館の両義性について言及している。

また、それにくわえて、もしフーパーグリーンヒル⁴の言うように、博物館がポストコロニアルな「接触領域」として、様々な力や特権が混じりあった「多様な歴史、言語、経験、声が出会う場所」として確保されな

ればならないとするなら、ビショップ博物館のような「文化の境界」に存在する博物館は、「異なる言語の使用」や、「異なるグループの参加」、「従属的な文化集団が、支配的な文化に対してその単一性を打ち破るという活動」の場となりうる可能性をもつことを指摘している。しかし、この観点から現状をみれば、今日、新しく展開された表象には、まだ、真の「接触領域」の場にとって必要である視点の多様性はなく、導入されたのは先住ハワイ人の視点であるに留まっている。それは、コロニアルな表象の支配関係を逆転させるようなポストモダンの到来を感じさせるものであるが、同時に、真に「接触領域」な空間となりうるのかという新たな疑問を生じさせていることも指摘し、論考を閉じている。

論文審査結果の要旨

20世紀末以来、グローバルな民族主義、ローカルな先住民意識の高揚が、博物館が提示する文化表象のあり様に挑戦を続けている今日、ポストコロニアルの民族的イデオロギーを前にして、博物館が先住文化をめぐる表象とどのように向き合うのかという本論文が投げかけるテーマは、アメリカのみならず、多文化状況が進行する先進国社会が先住民文化と切り結ぶ政治的関係の成熟度を測る一つの試金石として興味深いものといえるだろう。

本論文は、ビショップ博物館の展示において19世紀から今日まで展開されてきた先住ハワイ人にかんする文化的表象の変遷を分析の対象とし、そのテーマに対して、示唆に富むひとつの回答を提示したものである。本論文で展開された論考は、その意味で、博物館という限られた場を超えて、文化人類学にせよ、社会学にせよ、今日の先住文化に向けられる研究のまなざしが不可避的に遭遇するポストコロニアルな状況を切り開く重要な示唆をもあたえるものとなっている。

以上の諸点にかんがみて、本論文はすぐれて独創的であり、今後のこの分野の研究の発展や博物館における具体的な展示ポリシーの構築に重要な示唆を与えるであろうことが期待できるものである。

よって、この大林純子氏の博士請求論文、および、その公聴会と口頭試問（2014年1月25日開催）の試験結果にもとづき、審査委員会は、全員一致で、本論文提出者である大林純子氏が博士（総合政策）甲号を受けるに値するものであることを認めるものである。

【注】

- 1 Clifford, James. 1997 *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Harvard University Press.
- 2 1990年に発効した「アメリカ先住民墓地保護再葬法」(Native American Graves Protection and Repatriation Act、通称“NAGPRA”)を受けて、過去に発掘された遺骨や副葬品の返還をめぐるビショップ博物館とハワイ先住民コミュニティの間に生じた紛争と長期にわたる論争。
- 3 ハワイ先住民運動には、完全独立から部分的独立権の主張まで、多様なグループが存在している。NAGPRAをめぐる闘争では、運動組織の1つである *Hui Malama o I na Kupuna o Hawai'i* が尖鋭的な返還要求活動を展開した。
- 4 Hooper-Greenhill, Eilean 2000 *Museums and the Interpretation of Visual Culture*, Routledge.